

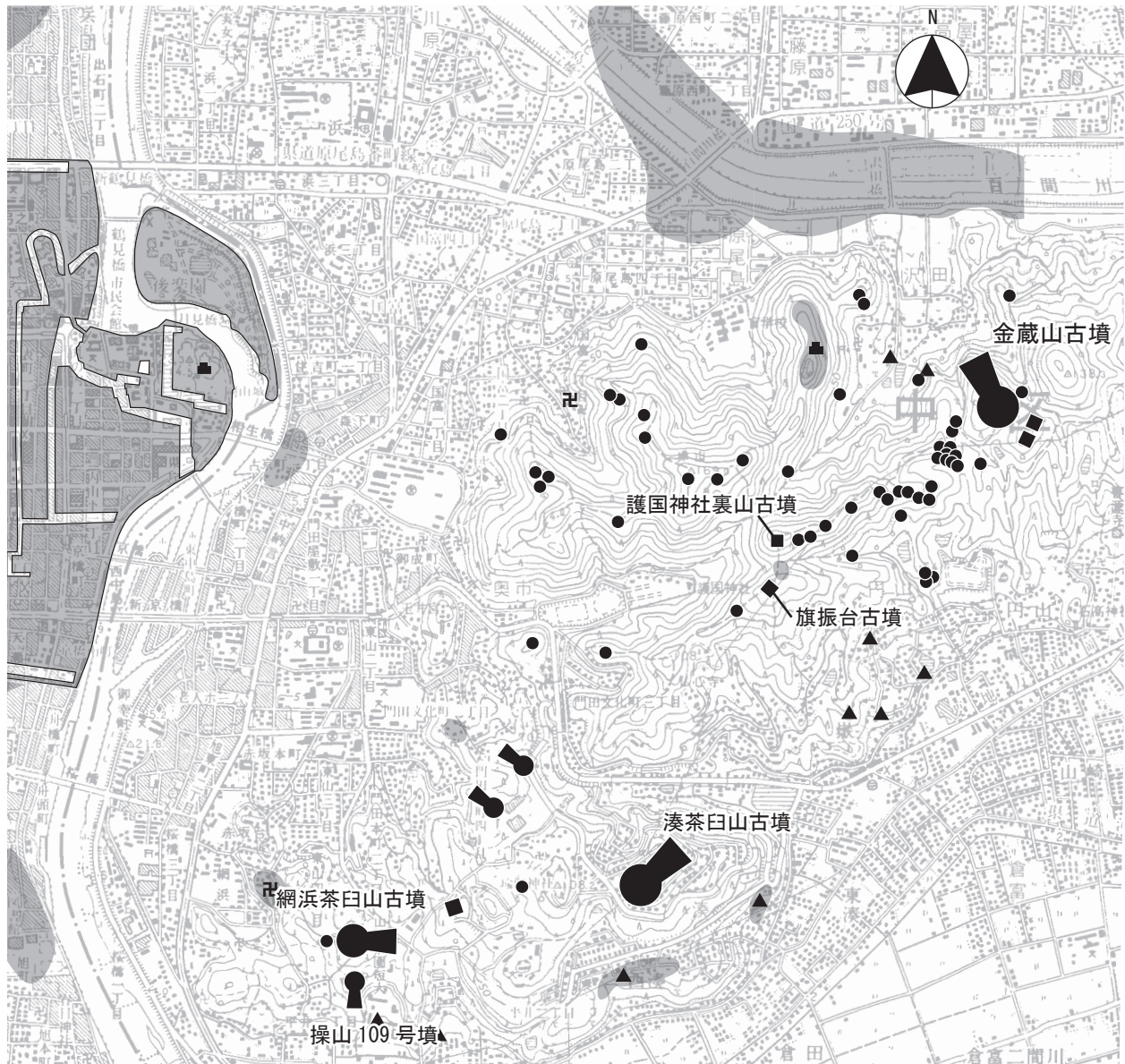
かな くら やま こ ふん
金 蔵 山 古 墳

範囲確認調査現地説明会資料

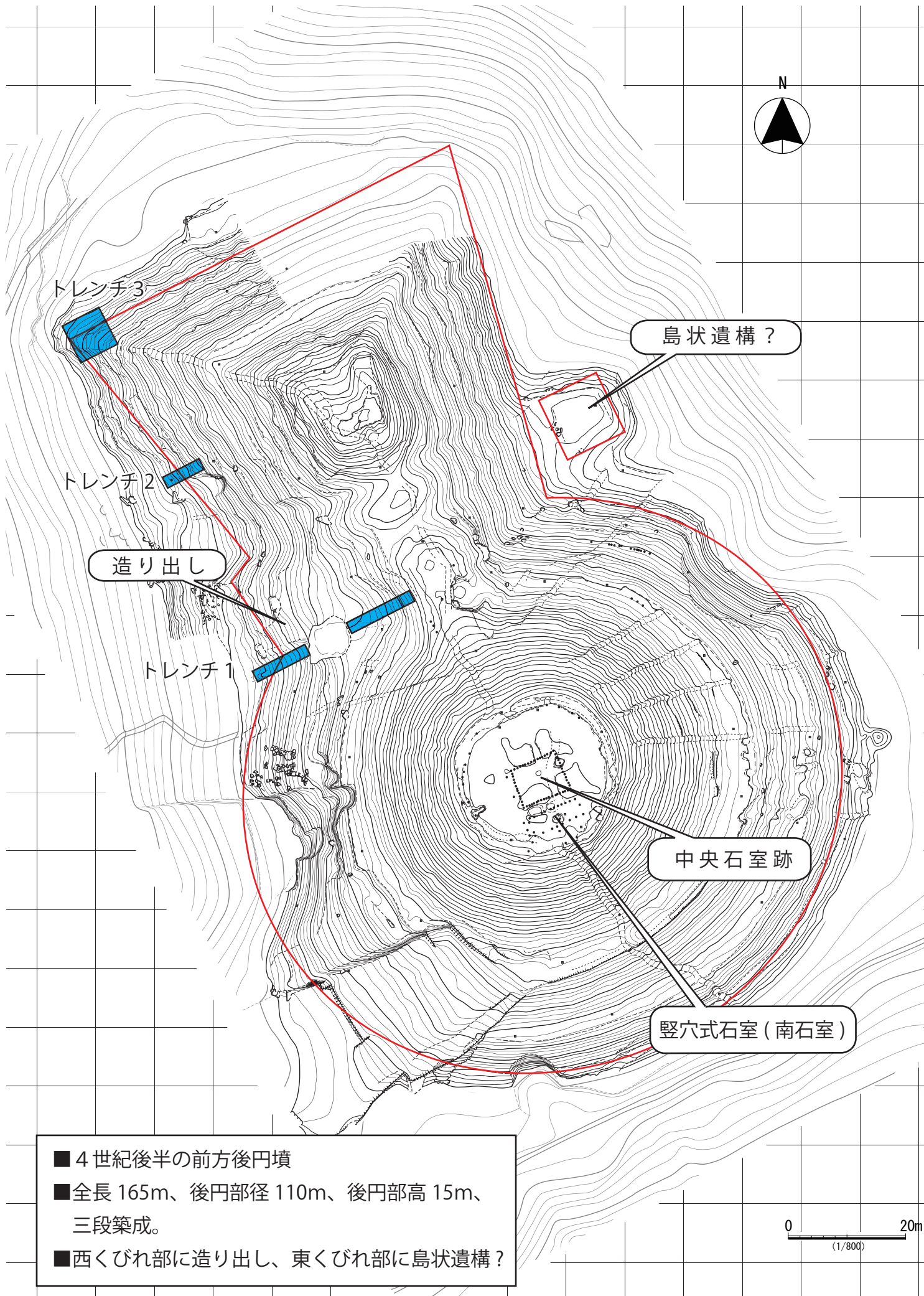
古墳の概要

操山丘陵のほぼ中央、標高 100 m ほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長 165m といわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳築造以前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品が出土したといい、昭和 28 年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われました。発掘調査は後円部墳頂を中心に行われ、2 基の竪穴式石室、副葬品用の小石室、それぞれの石室を囲む埴輪列などが見つかるとともに、多量の副葬品、多彩な埴輪類が出土しました。

現在、古墳全体が山林となっており、古墳全体を観察することはほとんどできません。吉備を代表する古墳のひとつであり、規模や埋葬施設などの遺構、優秀な副葬品や埴輪類など学術的、学史的にも非常に価値が高く、保護や活用を図っていくことが課題となっています。



金蔵山古墳と周辺の遺跡



- 4世紀後半の前方後円墳
- 全長 165m、後円部径 110m、後円部高 15m、三段築成。
- 西くびれ部に造り出し、東くびれ部に島状遺構？

発掘調査の概要

発掘調査は墳丘の規模、形態、構造等を追求し、将来は史跡等の保護の措置を図っていく計画です。今年度は前方部西側斜面を中心に、造り出しの有無、古墳墳端の位置と構造などを追求するため、トレンチ1～トレンチ3を設定しました。

トレンチ1

トレンチ1は西側のくびれ部付近にあたります。現状では前方部斜面が張り出しているように見え、巨大な岩盤が何か所も突き出しています。そのため、この張り出しが古墳にともなう造り出しなどの遺構であるのか、自然地形に伴うものであるのか追求するため設定しました。

トレンチ上部（T1-1）では前方部斜面の葺石と広い平坦面、そこに設置された埴輪列を検出しました。埴輪列は円筒埴輪列と柵形埴輪列^{さくがた}で区切った中に、家形埴輪^{かこいがた}、冪形埴輪^{かこいがた}を設置しています。蓋形埴輪^{きぬがさがた}の破片が集中する部分もあり、付近に立てられていたようです。この平坦面と埴輪群は墳丘の上段平坦面と下段平坦面の間に位置しており、造り出しに関連する特別な埴輪の区画である可能性が高いものです。

トレンチ下部（T1-2）では後円部から造り出しにかけての斜面と墳端を検出しています。造り出しは、後円部に直接接続しているようで、トレンチ内に後円部斜面と造り出し斜面の角が観察できます。墳端部は墳丘斜面下端の外側に「犬走り」のような外周施設と埴輪列をもつ特殊な構造です。墳丘斜面葺石と円筒埴輪列の間には川原石を敷き詰め、埴輪列より外側は大ぶりの割石を列石状にならべ埴輪列との間に小ぶりの割石を詰め込んでいます。また、列石の外側にも割石を帯状に敷き詰めているようです。

トレンチ2

トレンチ2は前方部西側面の墳端位置と構造を追求するために設けました。墳端部の構造はトレンチ1と共通していますが、葺石の根石もはっきりせず、葺石石材もやや小ぶりなものが多く、円筒埴輪も径が小さいように見えます。墳丘は大半を地山を加工して造りだしており、墳端構造の部分のみ盛土が観察できます。

トレンチ3

トレンチ3は前方部北西側の隅角、前端側墳端の位置と構造を追求するために設けました。ここでは前端側斜面の葺石を検出していますが、トレンチ1や2のような墳端部の構造は不明です。西側斜面部分は急斜面のため崩落してしまったのか葺石は残っていませんでした。また、トレンチ2では地山を加工して墳丘を造りだしていましたが、ここでは盛土で墳丘が造られています。この盛土は調査範囲外に及んでおり、盛土の範囲や盛土端部の構造などは今後の調査課題です。

また、前端部は中世に大きく造成されているようで、葺石より北側を大きく削平した後に盛土をしている状況が観察できます。この盛土の中からは備前焼などが出土しています。

まとめ

範囲確認調査は今年が初年度ですが、造り出しの存在とそこに伴うとみられる埴輪群、特異な墳端構造など多くの成果をあげることができました。特に造り出しの埴輪群は配置状況もわかる良好なものであり、造り出しの性格や起源、古墳の中での役割などを解明するうえで重要な手がかりです。

トレンチ 1 模式図

